

水俣事件と桑原史成の略年表

(一九〇六—二〇一三年)

年	事項
一九〇六(明治38)	1月12日 曾木電気創立 社長野口遵(したがう)(一九九六年帝国大学工学部(後の東京大学工学部)電気工学科卒)、資本金二〇万円、本店は鹿児島県伊佐郡大口村
一九〇八(明治38)	8月20日 水俣村に日本初の電気化学工業 曾木電気が日本カーバイド商會を合併、水俣村の水俣川川尻に日本最大のカーバイド工場、日産能力一〇トン 11月10日 日本窒素肥料発足 曾木電気が「日本窒素肥料株式会社」と商号改名、本店大阪市、公称資本金一〇〇万円(一九二七年5月朝鮮窒素肥料設立で興南工場に電気化学事業を拡大、四五年敗戦で水俣工場へ引き揚げ、五〇年に新日本窒素肥料、六五年にチッソ、二〇一一年に事業部門を分社化しJNCへと社名変更)
一九三〇(昭和5)	有機水銀中毒の文献 チューリッヒ大学法医学教授H・ツァンガーらが無機水銀中毒と有機水銀中毒とを区別し、アセトアルデヒド工程中の水銀触媒が有機水銀になる可能性とその中毒例を報告(慢性症状特に心臓障害、多発神経炎、多発性硬化症、詐病などとされた症例を有機水銀を含む要因による中毒と判断)
一九三二(昭和7)	5月7日 水銀汚染始まる 水俣工場アセトアルデヒド設備稼働、廃液を無処理で百間港へ
一九三三(昭和8)	3月24日 物質的進歩への警告 水俣出身の徳富蘇峰が水俣婦人会へ手紙「水俣ハ昔から風俗醇美人情敦厚肥後に於ケル染土デアッタ。最近物質上長足ノ進歩ヲ来シ工業地トシテ将(ま)々商業地トシテ其ノ面目ヲ一新シタルコトハ寔(まこと)ニ祝著ノ至リテアリマス。ケレトモ此ノ物質的進歩ニハ必ラス精神的心靈的ノ進歩ヲ以テ調節スル必要カアリマス」
一九四一(昭和16)	11月13日 最も早期の胎児性患者が出生か 水俣町袋湯堂に出生の女児が胎児性の疑い(七三年熊大医学部第二次水俣病研究班の報告書に記述)
一九五〇(昭和25)	初夏 海と生物に広範な異変 水俣市袋茂道、袋湯堂などで魚が浮き、ネコが狂い、カラスや水鳥がおちる(以後毎年のように異変を目撃、と後の各種文献に記述される)
一九五三(昭和28)	12月 劇症奇病患者が続発 漁民とその家族に精神症状、失明、運動マヒから廃人となり死者や重症者(アル中、精神病、神経炎などと誤診され、発病を隠し集落に潜む患者もかなりいた、と後の診定または認定作業からも判明、奇病との認識もなすすでに死亡した者も)
一九五五(昭和30)	1月 乳児に脳性マヒ様の奇病続発 漁民集落で相次ぎ出生(死産、流産、墮胎、乳児期に死亡などの実態で総合的な調査研究資料はなし)
一九五六(昭和31)	5月1日 水俣奇病(後の水俣病)の公式発見 新日窒水俣工場付属病院の医師が「脳症状を呈する奇病が発生、その四人(水俣市月浦坪谷の田中しず子、実子ら)が入院」と届け出

一九五六(昭和31)	5月28日 水俣市が奇病対策委を設置 水俣市医師會が過去の誤診を見直す(7月27日奇病患者を隔離し患者の家や井戸水を消毒、8月24日熊大医学部に水俣奇病研究班を設置、11月3日同研究班が非公開で中間報告、同27日国立公衆衛生院が現地視察調査。奇病対策委が年末までに患者五二人を診定。ほかに隠れた患者も多数と後に判明)
一九五七(昭和32)	1月17日 「汚悪水の放流、直ちに中止を」 水俣市漁協が決議により水俣工場に要望書 3月4日 自主的漁獲禁止の方針 熊本県が水俣奇病対策連絡会で決定 3月22日 ネコ飼育試験で発病 熊大研究班員の依頼で水俣の漁家が熊本市のネコを飼育 全例が奇病を発病(4月4日に水俣保健所でも水俣の魚を食べさせたネコが高率に発病) 6月24日 「水俣病」の用語を提唱 熊大医学部水俣奇病研究班第三回報告会で病理学の武内忠男が「中毒性因子が確認されるまでは本症を水俣病と仮称することにした」。以後医学報告では「水俣病」の用語へ 8月1日 水俣奇病罹災者互助会結成 会長渡辺栄蔵、後に水俣病患者家庭互助会と改称 9月11日 「食品衛生法を適用できない」 熊本県の問い合わせに厚生省が文書で回答
一九五八(昭和33)	6月 行政文書に「水俣病」 水俣奇病の厚生科学研究班主任松田心一が「いわゆる水俣病に関する医学的調査研究成果」を厚生省に提出(六〇年)にかけ順次水俣病の用語が定着) 8月4日 奇病の恐怖が再現 袋湯のカニを食べ中学生が発病(この年新たな患者四人診定) 9月12日 国家責任に触れた初の文書 水俣病患者家庭互助会長渡辺栄蔵が熊本県知事桜井三郎に嘆願書 仮に工場の排水により原因があるとしても、何らの対策もなく排水を許可しているのは国でありその責任の一半は国にある。栄養費の支給を 9月 排水の出口を密かに変更 新日窒水俣工場がアセトアルデヒド工程の水銀廃水の排出を百間港から水俣川河口へ(五九年春から)河口や津奈木村方面の漁民に新たな劇症患者
一九五九(昭和34)	7月14日 「水銀に注目」 熊大水俣病研究班が魚介類の汚染毒物について厚生省に報告(病理教授武内忠男、第一内科助教徳臣晴比古は有機水銀と主張、8〜10月水俣工場が数度にわたり反論) 7月21日 細川実験 新日窒付属病院の元院長細川一(はじめ)が水銀廃液をネコに直接与える実験を独自に開始(10月6日ネコ四〇〇号発病、六〇年夏に実験再開、工場内研究班で発病再現実験を経て六二年2月までに原因物質をメチル水銀と確認と後に判明) 11月2日 新日窒水俣工場へ突入 不知火海三六漁協漁民が排水停止と補償を求め、事務機器を壊し投石

日 桑原史成写真集 水俣事件と藤原書店

2013年

一九五九(昭34)	<p>12月30日 見舞金契約 患者家族初の工場前入り込み(11月25日)、患者一人一律三〇〇万円の補償要求を工場が拒否、熊本県の調停で発病から死亡までの年数×一〇万円+葬祭料三〇万円などで調印(将来水俣病が工場排水に起因と決定しても補償の要求は一切しないとの条項も)</p> <p>3月30日 単独で調査 東大化学工学大学院生の宇井純が新日窒水俣工場を訪問、事件解明を決意</p> <p>5月 「週刊朝日」 5月15日号で現地ルポ「水俣病を見よ」 記者小松恒夫の記事に触発された青年桑原史成が水俣事件の撮影を決意する</p> <p>7月14日 写真家を目指す青年桑原史成が水俣へ 水俣市立病院院長の大橋登の許可を得て水俣病専用病棟などで撮影開始、後に胎児性と診定される未認定の乳児と母など多数撮影</p> <p>10月7日 「水俣病のために大きく報道していただくことを願う」 葦北郡津奈木村警城の劇症患者船場藤吉(五十九年9月発病、同月26日水俣市の水俣病専用病棟入院、同年12月5日死亡、同じ時期に同じく入院した岩蔵の4男で網元の跡継ぎ)の妻恵美香が桑原史成に手紙</p>
一九六〇(昭35)	<p>1月 宇井純と桑原史成が東京で出会う「朝日ジャーナル」2月4日号ルポ「問題の地(4) 水俣」で「水俣病事件は「解決済み」ということの中身があまり」と書いた副編集長高津幸男が宇井と桑原を東京でひきあわせる。以後宇井と桑原の協力で水俣事件の解明行動へ</p> <p>4月27日 新日窒水俣工場で安定賃金闘争 九カ月の長期闘争へ。スト権放棄を求める会社側に労組が分裂(六八年以降、会社に差別された第一労組員有志が患者支援運動へ参加)</p> <p>7月9日 桑原史成の写真七枚を初めて掲載 週刊誌「女性自身」のグラフィック・レポート「生きている人形」を抱えた一家」で松永久美子ら</p> <p>8月11日 桑原史成が極秘データを接写 宇井純と桑原史成が新日窒付属病院で医師小嶋昭和に取材、社内研究班の水俣病原因物質追試実験報告書「精溜塔廃液について」のデータの一部などを接写(接写データを解読した宇井が真相をつかみ、後に膨大な調査記録をまとめる)</p> <p>9月15日 水俣病事件で初の写真個展 桑原史成「水俣病——工場廃液と沿岸漁民」東京有楽町の富士フォトサロンで一〇五点を展示(六三年日本写真批評家協会新人賞)、富士写真フィルム宣伝課長石井彰が化学業界から個展中止の圧力を受けたが10日間開場</p> <p>11月1日 雑誌「世界」で桑原史成が写真報告 未認定患者半永一喜の家庭、タコ漁、食事風景など五枚を掲載。桑原が解説「暗い海——水俣漁民のその後」</p> <p>11月29日 医学が胎児性水俣病を認める 水俣病患者診査会が七時間の議論の末一六人診定</p>
一九六四(昭39)	<p>3月1日 ネコ四〇〇号実験と経緯を記した細川ノートの存在を知る 宇井と桑原が愛媛県大洲市に元水俣工場付属病院長の細川一を訪問、細川が告白。この後桑原が三度目の水俣取材</p> <p>8月12日 初の患者支援活動 熊本短大社会事業研究会(顧問は同大教授内田守)の女子学生西北ユミ(後の永野ユミ)らが水俣病の子供を励ます会。熊本市で桑原作品の展示など</p>

一九六四(昭39)	<p>11月 記録映画作家土本典昭が水俣へ 桑原史成の作品に触発され日本テレビの番組「水俣の子は生きてる」のロケハン開始(以後約三〇年間、水俣病事件の映画を連作)</p>
一九六五(昭40)	<p>3月10日 初の水俣病写真集 桑原史成が「水俣病」三一書房を出版。未認定患者の存在やマスコミ報道の欠落を批判する文章のほか巻末で宇井純が無署名で工場の秘密実験を解説</p> <p>6月12日 第二の水俣病 新潟大学教授樺忠雄らが水俣病に似た有機水銀中毒と記者発表</p>
一九六六(昭41)	<p>5月1日 桑原史成が四回目の水俣取材 胎児性患者らとの後などを撮り、宇井純や石牟礼道子、松本勉(水俣市職労)らと交流</p> <p>10月8日 桑原史成が五回目の水俣取材 水俣市湯ノ見のリハビリセンターで「生きる人形」松永久美子の瞳ほかを撮影、赤崎寛(元水俣市衛生係)らの協力で漁村風景など取材</p>
一九六七(昭42)	<p>6月21日 桑原史成が新潟水俣病事件を取材 「アサヒグラフ」記者と同行 昭電鹿瀬工場、住民検診風景など撮る</p>
一九六八(昭43)	<p>1月12日 水俣病(対策) 市民会議発足 宇井純らの呼びかけで新潟水俣病訴訟原告患者らが水俣を訪問するに際し、同会議会長の日吉フミコ、事務局長の松本勉らが熊本訴訟に向けて広範な患者支援運動開始</p> <p>9月26日 水俣、新潟の水俣病を公害病に認定 政府が発表、チソソ社長が患者宅でお詫びへ。これ以降、水俣病患者支援運動が全国へ広がる</p> <p>12月7日 桑原史成が六回目の水俣取材 石牟礼道子や大橋登を訪問、リハビリセンターの胎児性患者、月浦坪谷の小児性患者田中実子、湯堂の松永久美子の父善一、茂道の網元中村荒蔵、杉本進らを撮影</p>
一九六九(昭44)	<p>1月28日 石牟礼道子「苦海浄土——わが水俣病」 講談社から出版、桑原史成の作品二三点も収録。七〇年以降に多数の患者運動支援者が水俣訪問</p> <p>4月5日 患者家庭互助会分裂 厚生省に患者補償処理を白紙委任の一任派(後に六四世帯)と自主交渉継続派(6月14日熊本訴訟提訴の時点で訴訟派二九世帯)が以後別行動へ</p> <p>4月20日 水俣病を告発する市民の会(熊本告発) 発足 以後全国各地に告発する会が発足、水俣市役所に遺棄されていた桑原作品を無断で街頭デモに掲げるなどの支援運動も</p> <p>8月21日 戯曲「告発——水俣病事件」 作・演出は高橋治、上演は劇団泉座。東京・新宿の紀伊国屋ホールで初公演。以後東京・六本木の俳優座劇場ほかで公演、上演で桑原作品を映写</p> <p>9月7日 水俣病研究会発足 水俣病対策市民会議の裁判研究班が、熊大若手学者、水俣病を告発する会と結成。岡本達明、花田俊雄、山下善寛、小坂谷義(いづれもチソソ水俣工場第一労組)、原田正純(熊大神経精神学)、二塚信(公衆衛生学)、富樫貞夫(民事訴訟法)、丸山定巳(社会学)、本田啓吉(熊本県立第一高校教師)、宮沢信雄(NHK熊本放送局アナウンサー)、半田隆(同技術)、小山和夫(学習塾教員)、有馬澄雄(学生)、石牟礼道子。東大助手宇井純、合化労連書記近藤完一、後の岡山大学教授阿部徹(民法)らが外部から協力</p>